やまなし自然首都圏構想研究会
第６回自然首都圏構想推進部会　議事録

日時：令和３年１０月１８日（月）14:00～15:00
場所：山梨県庁本館２階特別会議室（テレビ会議）

◆出席者：長崎　幸太郎　山梨県知事

【ゲスト　山梨県顧問】
田坂　広志　　多摩大学大学院 名誉教授

【座長】
東　　博暢　　（株）日本総合研究所 主席研究員

【委員】※50 音順
清水　喜彦　　ＳＭＢＣ日興証券（株）　顧問
中村　成志　　ＳＯＭＰＯホールディングス（株）
シニアマーケット事業部スマートコミュニティ室
特命部長兼室長
藤沢　久美　　シンクタンク・ソフィアバンク 代表
山崎　豪敏　　（株）東洋経済新報社 常務取締役執行役員 編集局長

【事務局】
リニア未来創造局　局長、理事、リニア未来創造・推進課長
観光文化部　文化振興・文化財課長

◆会議次第：１　開会
２　知事挨拶
３　議事
〇文化芸術による地域活性化
４　閉会

［知事挨拶］

長崎知事

・大変お忙しいところ、やまなし自然首都圏構想研究会第６回自然首都圏推進部会にご出席を賜り、まことにありがとうございます。

・今回のテーマは「文化芸術による地域活性化」であり、山梨県顧問をお引き受けいただいている田坂先生からご講演を賜りたいと思う。心から感謝申し上げる。

・今、山梨県においては文化芸術というものをどう位置付けて、盛り上げていこうか、ということを検討している。

・コロナ禍からの立ち直りを超えて、本格的に地域の高付加価値化を図っていくにあたり、やはり付加する価値の特色、或いはオリジナリティーについて、どういう方向性を定めていくのか、ということは大変重要になると思う。

・平々凡々なものでは、全く付加価値がつくわけがなく、ここに多くの人、他の人を引きつけるオリジナリティをどう伸ばしていくか、ということが重要だろうと思っている。

・それにあたり、出発点・土台として伝統的なものと、新たな、今内々にはない要素、山梨県の外からの新たな価値観、或いは要素をどうそれぞれ取り入れ、伸ばしていき、なおかつその相互作用をどう生み出していくか、ということによって本県の次世代の価値の方向性、オリジナリティが見えてくるのではないかと考えている。

・この価値あってこそ、オリジナルな今までの歴史、文化、その土台の延長線上のオリジナルな価値観と、そこにとどまらない、排他的なものではなく、更にその外からの様々な要素をどんどん取り入れて生まれ変わったその価値観こそ、山梨県民の自己肯定感につながってくるのだろうと思うし、山梨というもののトータルな意味でのブランド価値の向上が実現できるのではないかと思っている。

・後ほど、文化芸術施策の現在の基本計画となるものを紹介するが、本日以降、先生方からいただいたご意見をもとに、抜本的に見直して、ゼロから立ち上げるぐらいのやり方で臨んで参りたいと思う。

・委員の先生方の忌憚のないご意見を是非とも賜れれば幸いである。どうぞよろしくお願いいたします。

［議事］

（事務局から資料１の説明後、田坂顧問からの講演）

［講演］

田坂顧問

・本日は、「富士五湖ルネッサンス構想」や「山梨県の文化立県」について、話をするようにということで、資料の共有をさせていただく。

・短い時間なので、先ほどご紹介いただいた県の取り組み１つ１つにコメントするという

視点ではなく、現実にどう動かしていくかという視点でコメントをしたいと思う。

・まず、「富士五湖ルネッサンス構想」というのは、私の住んでいる河口湖や山中湖を中心に、富士五湖地域、富士北麓地域の新時代を切り拓くために、どのようにこの地域を活性化していくかという問題意識で、いま様々な関係者と議論しながら構想を練り上げているところ。

・現在、７つの中核プロジェクトが議論されているが、まだスタートの段階なので、参考までに、１つずつポイントを申し上げたいと思う。

・まず第一は「富士五湖自然首都圏」プロジェクトであるが、これは言うまでもなくこの自然首都圏構想研究会のビジョンを、どこかで具体的に実現していこうというプロジェクトであり、まずは、この河口湖、山中湖など富士五湖の周辺でこの構想を実現しようというプロジェクトである。特に、この地域には様々な観光資源があるので、そういうものを生かした自然首都圏構想にしていきたい。

・第２は「スタートシティ富士五湖」プロジェクト。この「スタートシティ」という言葉は造語だが、まず、スタートアップする、起業をしたいと思うなら富士五湖地域が良いと思っていただく。それだけでなく、何か新しいことを始めようと思うなら、富士五湖、河口湖、山中湖といった自然の豊かなところで、その新しいことを取り組んでみてはどうかと提案する。例えば、企業が新しいスタイルの社員研修をやろうと思ったときや、何か新しいイベントを始めるときは、この富士五湖地域で心機一転スタートする、というような意味で、この「スタートシティ」という考え方を提案している。

・第３は「アートシティ富士五湖」プロジェクト。これは、まさに今日のテーマと結びつくが、その中心にあるのは、この自然首都圏構想であり、この富士五湖地域に東京で働いていた方々も移住してきて頂き、快適に仕事をして頂くことをめざしている。そのとき、ただ仕事ができればいい、自然があればいいというものではなく、やはり文化や芸術的なものがないと、どうしても東京や首都圏から来た方は寂しさを感じるだろう。そこで、文化、芸術、音楽というようなものを中心に、「アートシティ」と呼ばれるような地域づくりができないかと考えている。幸い、アミューズが西湖畔に移ってきたり、多摩美大が山中湖地域に新しい施設を作るなどの動きもあるので、こういった動きを活用していきたい。

・第４は「富士山麓アカデメイア」プロジェクト。これは、一言で言えば、この地域を「人材育成の場」にしていこうというもの。この「アカデメイア」は、古代ギリシアのプラトンがアテナイの近くに創った施設の名称を借りたものだが、例えば、首都圏の企業が「人材研修は、やはり富士山麓でやると面白い」と思って頂くとか、将来、「日本版ダボス会議」のようなものをこの地域で開催できないかなどを考えている。また、ホテル事業に関連する海外の大学が、この地域に拠点を作るというプロジェクトも、検討されている。

・第５は「河口湖ルネッサンスタウン」プロジェクト。以上述べたような動きを、どこか

の場所で具体的にと考えると、河口湖地域というのはかなり観光施設や文化施設も整備されているので、まずここをシンボル拠点にしてはどうかと考えている。

・第６は「山中湖ルネッサンスビレッジ」プロジェクト。山中湖ももちろん河口湖以上の歴史もあり、観光や文化の施設もあるが、ここは広大な県有地があるので、この県有地をどう活用していくかも大きなテーマである。その時に、例えば、いま県全体として力を入れている水素エネルギーなどもインフラとして導入すると面白い地域実験ができるだろう。

・最後の第７は「富士山エコツーリズム」プロジェクト。その中心は富士山登山鉄道だが、これは環境問題についての様々な議論が出るテーマであることを考えると、鉄道をやるかやらないかという議論にとどめず、この富士山周辺の環境をどう保護していくのか、景観を整えていくのか、ということを一体となってやっていくべきだろう。その意味で、「エコツーリズム」という構想の中に位置づけている。

・以上が「富士五湖ルネッサンス構想」の７つの中核プロジェクトであるが、なぜ、こういう構想を掲げるかといえば、いつも申し上げていることだが、こうした地域活性化プロジェクトを進めるためには、「ビッグピクチャー」というものが非常に重要だと思っている。

・例えば、今回、新たな政権が「新しい資本主義」ということを述べている。これから、その中身が問われるわけだが、まずはビッグピクチャーという意味では、なかなか面白い構想を掲げたと思う。国民が「何が起こるのか」と思えるようなビジョンを掲げたと思う。

・地域でも、このビッグピクチャーをしっかり掲げるべきだろう。なぜなら、「物理」の世界は大きなものほど動かしにくいが、「心理」の世界は大きなものほど動かしやすいからだ。

・すなわち、地域活性化のためには、色々なプロジェクトを個々ばらばらに進めるよりも、「ラッピングペーパー」（包み紙）が非常に重要である。様々な小さなプロジェクトを包み込んでいく「大きな物語」がないと、せっかく様々なことをやっても、その魅力が伝わらない。実際、先ほど事務局から説明があったように、県としても文化芸術について様々な取り組みをされているが、ぜひ、この「大きな物語」をしっかり掲げられるべきだろう。

・そのことを申し上げたうえで、この山梨県の「文化立県構想」について、大きな視点で考えるべき７つの問いを申し上げたいと思う。

・まず第１の問いは、「計画」ではなく、「戦略」は何か、ということ。この「計画」と「戦略」の違いはお分かりになると思うが、県としては大変な苦労をされて様々な「計画」を立て、実行に移されている。それは先ほどの資料を見てもよく分かるが、この「計画」だけでなく、「戦略」というものを県として明確に持つ必要がある。そして、「戦略」とは「戦い」を「略く」（はぶく）こと。すなわち、「最小の努力」で「最大の

効果」を挙げる思考のことを「戦略」と言う。これが、これからの時代には、すべての地方自治体に求められることである。

・そのことを理解されるならば、第２の問いである。すなわち、少ない予算と人員で、大きな効果と動きを生み出す「戦略」を採っているかということである。先ほどの資料を拝見しても、県の担当者の方々は、本当に様々な方面での施策に目を配られているが、やはり、予算も人員も限られている。従って、「戦略」が重要になるが、本日は「３つの戦略」、すなわち「注目」「共助」「連携」、この３つの視点での戦略を検討して頂ければと思う。

・まず「注目の戦略」であるが、これが、第３の問い、「注目経済」の時代に、考え抜いたメディア戦略を採っているかということである。いまの時代は、「注目経済」（アテンションエコノミー）の時代であり、「注目」を集めることが大きな経済効果を生み出す時代である。従って、これを考え抜いたメディア戦略を採っているかという問いである。

・本日も、メディアの方々が沢山いらっしゃっているが、県の側からこのメディアとどう連携していくかということ。このことを本気でやろうとすると、先ほど示された、県としての様々な動きを、大きなラッピングペーパーで包み、どのような魅力的な「物語」として見せるのか。これが一番重要な「注目」（アテンション）の戦略である。

・同時に大切なのが、この物語の「語り部」である。これも、以前、この研究会で申し上げたが、これからの時代には、企業は「プレジデント・アイデンティティ」、つまり社長が会社のシンボルになってくる時代だ。同様に、これからの時代には、自治体は「ガバナー・アイデンティティ」、すなわち、知事が県のシンボルになる時代だと。実際、長崎知事は、これまでも「語り部」として「ワイン県」と称して副知事を任命したり、色々と面白いことをされているので、この「文化」についても、物語の「語り部」として、堂々とメディアを通じてメッセージを発信されるべきだろう。

・もう一つ重要なことは、この物語には熱心な「伝道者」が必要だということ。これは単にプレスリリースをするという次元ではなく、この熱心な「伝道者」をどう育てていくか、これは、後で述べる「社会起業家」などが重要な役割を果たすと思う。

・その上で、第４の問いは、「目に見えない経済」と「目に見えない資本」を活用する戦略を採っているかということ。

・この「目に見えない経済」や「目に見えない資本」は、実はこれから「新しい資本主義」というものを論じるとき、極めて重要になる。これまで政府にもそのことを提言申し上げてきたが、新政権が、この「新しい資本主義」を掲げるのであれば、これまで無視されてきた「目に見えない経済」、すなわち「ボランタリー経済」をどう活性化していくかが極めて重要である。私は、この経済を「共助経済」と呼んでいるが、自助、共助、公助という考え方の中で、改めて、この「共助」を支える経済原理、ボランタリー経済を活性化し、活用することが、地域においても、これから大きなテーマになってい

く。
・幸い、新政権は、この「新しい資本主義」は、地域から生まれてくると標榜しているのであるから、これは非常に良いタイミングである。
・特に、この「文化」というものを興していくとき、単に幾らの予算を使ってどこどこにお金を回したら幾ら儲かった、という次元の視点だけでは足りない。このボランタリー経済がどれくらい活性化したかという視点を持つべきであり、この力を活用するべきである。
・なぜなら、この「ボランタリー経済」、すなわち「共助経済」の中で回る資本というのは、貨幣資本・金融資本ではなく、知識資本・関係資本・信頼資本・評判資本・文化資本・共感資本、といった「目に見えない資本」だからだ。
・従って、「文化立県」の戦略を考えるとき、この「目に見えない資本」をいかに生み出し、回していくかをよく考えて、様々な戦略を展開されるべきである。
・そして、先ほど、物語の「伝導者」が必要だと申し上げたが、その一つが「社会起業家」と呼ばれる人々だ。これについては、先日、長崎知事と県庁の幹部の方々に提言申し上げたことだが、いずれ県として職員も限られる、予算も限られるなかで、「公的なサービス」を住民に提供するのに、県が頑張るだけではもう限界がある。そうであるならば、この公的サービスは民間が担える時代であることを理解し、「社会起業家」と呼ばれる方々を公的サービスの中に明確に位置付け、彼らの力を活用されてはどうか。
・特に、本日のテーマである「文化」を興していくときにも、そうした分野で活動されているＮＰＯや社会起業家の方々たくさんいらっしゃるので、こうした方々を育て、支援していくということが重要な戦略になっていくだろう。
・さて、第５の問いは、「社会的連携」の戦略を採っているかということである。
・「社会的連携」というのは、中央政府、地方自治体、財団法人、ＮＰＯ、市民団体、社会起業家、自治会、教育・研究機関、商店街、メディア等様々な社会的役割の方々が横に連携した時に、大きな動きが生まれるということ。
・もとより、誰もが、それは分かっているだろう。ただ、これまでは、連携をやろうとすると、個別の連携、例えば、県とある市民団体が提携したとか、県とある民間企業が協力したとか、県がある商店街と連携して活性化に取り組んだといったことになりがちだた。しかし、これからは、この社会的連携の戦略として、県主導の「コンソーシアム」を作られてはどうかと思う。
・東座長も日本総研で、色々なコンソーシアムを作られており、藤沢委員も最近、面白いコンソーシアムを作られたと聞いている。
・このコンソーシアムの戦略については、この後各委員からご意見があると思うが、このコンソーシアムとは、何か明確な計画をこつこつと前に進めていくようなプロジェクトチームではない。分かりやすく言えば、その中に様々な社会的役割の方々が集まり、ワイガヤをするような場である。メンバー同士で、「この商店街では、こんなことをやっ

た」とか「うちの市民団体は、こんなことやっている」とか「当社は、こんなサービスがある」といったことをワイガヤできるような場を創ることである。そうした場からこそ、面白い事業が創発してくる。すなわち、コンソーシアムとは、計画的に何かを生み出すという場ではなく、そのコンソーシアムの中から予期せぬ新しい動きが生まれてくるような場である。

・私も、かつてシンクタンクで１０年間、２０のコンソーシアムを創ってきたので、この辺りの機微は多少、分かってわかっているが、このコンソーシアムとは、いわゆる「ビジネスエコシステム」（事業生態系）が生まれてくるような場でもある。

・そして、もし県が、「文化産業」を育成したいと思うならば、コンソーシアムの戦略によって、このエコシステムを創るべきだろう。

・第６の問いは、「時代の風」を「追い風」とする戦略を採っているかということ。

・「時代の風」とは、例えば、新政権によって「新しい資本主義」というビジョンが掲げられたが、こうした動きを追い風にするということ。私は、１３年前から、この「新しい資本主義」のビジョンを述べてきたが、この「新しい資本主義」を地方から生み出していくときの一つの先進事例として、例えば、山梨県は、ボランタリー経済（共助経済）を活用して、新たな文化産業をこういう形で育てているといったことをアピールしても良いだろう。政府からも、支援を得られるかもしれない。

・また、別の「時代の風」としては、これも古くて新しい動きだが「地域通貨」というものを導入し、活用することも面白いだろう。最近、河口湖地域で、この地域通貨の実験をやろうという動きもあるが、その先進的地域として、鎌倉がある。この地域では、「鎌倉資本主義」というビジョンを掲げて、様々な動きが起こっているが、その中心になっているのが、カヤックという会社である。こういう会社とも連携して、河口湖地域で、地域通貨の実験をやろうかと考えている。

・また、もう一つの「時代の風」は、「水素エネルギー」である。このテーマでは、長崎知事が既に様々な動きをされているが、気候危機への挑戦という意味でも、この水素エネルギーは、これから、大きな注目を集めていくだろう。「水素」も、一つの新たな文化でもあり、県としては、こういうテーマを掲げても良いかと思う。

・いずれにしても、マスコミやメディアに注目して頂けるような「時代の風」「新しい風」というものを、うまく「追い風」に使うということが重要と思う。

・最後に第７の問いは、「時間資源」の視点により、「資源集中」の戦略を採っているかということ。

・これは、実は、清水委員が、かなり前からから指摘されていることだが、どれほど素晴らしい計画も戦略も、時機を逸すると、どんどん陳腐化し、差別化されてしまう。従って、「時間」というものは非常に貴重な資源であることを深く理解し、その資源を集中して、いち早く動くということを心掛けるべきである。

・このことは、本日の「文化立県の戦略」においても、極めて重要なことである。

・どうしても行政が掲げる政策は、総花的で広く薄くなってしまう傾向があるが、やはりどこかの段階で、「シンボルプロジェクト」というものを明確に定め、この地域でこういうプロジェクトをやる、とにかくこれを真っ先に動かす、ただし、その時に最初に申し上げた、大きな魅力的な「物語」と合わせてスタートする、ということが重要かと思う。
・以上が、今日のテーマ「文化立県」についての、「戦略」という視点からの私の提言である。

［意見交換］

東座長

・田坂顧問から、藤沢委員がコンソーシアムを作られたとのご案内があったが、藤沢委員からお話を伺えればと思う。

藤沢委員

・私のコンソーシアムは文化芸術とは関係なく、信託銀行及び一般企業を巻き込んだ20代の創発プロジェクト「104（とうし）コンソーシアム」というもので、こことは毛色が違うが、折角機会をいただいたので発言させていただくと、田坂顧問のお話はどれもうなずくばかりである。
・私自身、今回このお題をいただいたので、文化芸術で都市をどう開発するか、あるいは、文化芸術都市といったテーマで書かれた論文を幾つか読んでみた。その中で、大変読んでいて面白いなと思ったのは、文化芸術が都市開発の役割を持っていて、その役割の中で民主主義を担保する、創造性を担保するといったことや、アイデンティティを担保するというようなことであり、その中で特に、民主主義を担保する、そしてその地域における内発的な経済発展を後押しするものである、という記述にすごく惹かれた。
・そういう意味で、田坂顧問が今発表されたこととも、とても通じることだと思うが、要するにボランタリー経済や目に見えない経済資本のようなものを生み出していくときには、見えない資本、つまり関係性や信頼といったものがすごく重要になってくる。どうやったらその資本が生まれてくるかというと、やはり人がつながる場の設定がすごく重要になるが、場以上に重要なのはそこに集まりたくなるフックである。それは、田坂顧問がおっしゃるような、アテンションエコノミーにもつながるところだと思うが、その１つのアテンションエコノミーのさらに背景にあるものが文化芸術なのではないかと思う。
・美術館等、様々なものを見ていて思うのは、美術館というのは常にコンセプトを持っていて、そのコンセプトをもとに、次の世代にまで残すべき作品は何かという視点でキュレーションしているはずである。
・山梨県がどういう県として今後存在していくのかというコンセプトに基づいて様々な美術館等をまず組み立てていき、そこに、様々な事業体や社会活動体、アーティスト、そし

て必ず乗らなきゃいけない市民や県民と一緒になってコンソーシアムを作っていったときに、見えてこなかった信頼資本や関係資本や評判資本といったものが顕在化してきて、顕在化してきたときに、そこでさらに顕在化してくるのが新しい創発的な事業アイディアであったり、そして次に言語化しないといけない文化のようなものも、また表にあらわれてくるのかなと思っている。

・山梨県の基本政策を読んだが、私としては、そこに書いてある山梨県のあるべき姿を芸術文化という柱でまとめて解決する、というような戦略を立てるべきだと思う。

・最初に田坂顧問が「計画」ではなく「戦略」でとおっしゃったのはそこだと思うが、文化芸術をどう位置付けて、そして山梨県の目指しているあらゆるものをどう同時解決するのか戦略を描くと良いのではないか。そしてその際に文化芸術というのは市民が確実に参画できる一つの道具になるのではないか、と思っている。

清水委員

・田坂顧問に本当にしっかりとまとめていただいたのでまさにその通りだと思っている。

・私自身、ウエストポイント（アメリカ陸軍士官学校）で学ばせていただいた時に、戦略というのは、ストラテジックストーリーだと言われた。まさに田坂顧問のおっしゃる通り、そのストーリー、みんなが納得できるストーリーを書いていき、それにみんなを引きずり込んでいくということだと思う。

・それを実際やるときに、漠然とした話をしてもなかなか前進しないので、誰のために、何のためにやるのか。何をやるのか。いつまでにやるのか。こういう具体策が重要。すべてを網羅するのはなかなか難しいので、例えば、文化芸術と言ったときに、どこまで指しているのか。美術、陶芸、音楽、いろいろあると思う。全部できればいいけれど、実際問題、やるとなったら取捨選択せざるをえない。選択という意味では、どれを選んでどれを捨てるかという問題だと思っている。

・今、藤沢委員がおっしゃった通り、このストーリーについて、県民のためなのか、県に住んでる人のためなのか、日本人のためなのか、日本に憧れを持ってくれる海外の人のためか、それをもうまずはっきりすべき。当然、県がやることなので、県民のためというのが第一に来る。他を無視するということではなくて、第一義としては、それが来ると思っている。何のためにということで、目的感や、目標値が全然変わってきてしまうので、県、あるいは場合によって我々もご相談に乗る中で、これをまず決めるべき。

・何をやるのかというのは、文化という言葉の範囲が広いので、その文化の中で何をまず選ぶのかということ。

・いつまでにというのは、まさに本当に、最初から何回も意見しているが、後手に回ったら何の価値もないので、やりながら考えてもいいと思う。上手くいかなかったら、手法を変えるということもありうる。まさに田坂顧問のおっしゃってるエリアの問題であるとか、１つずつ、問題点が出てきたらその問題点を潰していくという作業をやらなくて

はいけないので、そこに早くたどり着かないと、どんどん、他に後手を踏むだけなので、もう、とにかく決めて走り出すべき。

・拙速でいいわけではないが、県民のためにというときに、目標としてはどうなのか。山梨県に来てもらう、職を求めてもらうのか、本当にそれだけなのか、それ以外にも何があるのかというのを決めて、文化としてどの文化にするのか、そして、いつまでにやるのという時間軸を一度しっかりと出して、議論をしてみてやり始めるというのがものすごく重要と思っている。

・最初からパーフェクトの計画なんて、考えるだけ無駄だと思っている。やりながら、取捨選択して、軌道修正をしていけばいいと思っているので、そんな考え方をしているが、いかがか。

長崎知事

・何のために文化なんだという部分だが、私としては、例えばこれは観光に役立つというようなレベルではなくて、要はこの山梨県が新たな価値を生み出す環境、新たな価値を生み出す場になる、というところまでをぜひ視野に入れて、その第一歩を踏み出したいなと思っている。それは今すぐ達成できるかは別として、その方向性を持って歩みを進められないかなと思っている。

・従って、文化芸術の中で、例えば音楽、書道等いろいろなものが個別で見るとあるわけだが、１つの分け方としては、今まで山梨ですでに根づいて県民の皆さんの血肉になっている、ある意味伝統的な文化或いは生活習慣、これが１つの出発点としてあるのではないか。

・もう１つの分類としては、今まで山梨県になかった、だけど他所から持ってきていただける新たな文化、それは音楽なのかもしれないし、生活習慣なのかもしれないが、そういう新たな文化と、この二本立てで分けてそれぞれが相互作用をもつことができないかというのが今の大きな問題意識。

・その相互作用の中で新たな価値が生まれてくるという循環をどう作ればいいのかなというのが、悩ましいところであるが、やや漠然として申し訳ないが、目指すべきところかなと考えている。

山崎委員

・大きな物語の必要性を本当に痛感している。

・その一方で、先ほど来皆さんがおっしゃっているように、具体的な、何をやるかという点について、小さなアイデアではあるが、提案させていただきたい。

・自分の仕事柄、本に関わっているが、文化というものを考えたときに一番身近な文化はやはり本だと思う。自分の仕事とつなげているわけではなくて、一般論として、本は１つの戦略として成立する可能性があると思っている。

・今、出版不況と言われて書籍の売り上げがやや減ってはいるが、雑誌に比べたら大健闘しているし、電子書籍への移行も漫画を除けば、20%以下で収まってきている。若い人の中には、紙の本に対する愛着を語る人も増えているという印象。電子化が進めば進むほど、紙の本の見直しが強くなっていて、特にアートブック、絵本の売り上げがどんどん増えている。
・本と都市という視点で考えてみると、世界的に見てブックフェアが圧倒的に文化拠点そのものになる。フランクフルトのブックフェア、ロンドンのブックフェア、ニューヨークのブックフェア、こういったものはコロナで苦境に陥ってはいるが、都市の文化的な格を非常に引き上げる存在。中国も最近、ブックフェアを必死になって立ち上げて世界中から人を集めている。
・一般的なブックフェアは巨大都市が行うものだが、例えば、イタリアのボローニャは、絵本のブックフェアとしてもう世界中から人が集まって、観光が行われ、ものすごい盛況で、１つのモデルになるのではないかと思う。
・絵本やアートブックは、世界的に広がりがあるものなので、子供向けの文化教育としても有効であるし、非常に需要が世界レベルで高まっていて、日本からの発信も非常にやりやすいということがある。
・そういった絵本やアートブックの発信拠点として、ブックフェアの聖地のような形でも、山梨県の取り組みがひょっとしたらあるのではないかとイメージした。
・山梨で実際にどうやるのかと考えた場合に、まずはそのステップとして人材の集積が絶対に必要と思うが、出版社は、東京にある必要は全然ない。それこそ出版業はリモートワークに一番合っていて、東京は家賃が高いし、出版不況で苦しんでいるので、山梨に中小系・零細系の出版社、或いはプロダクション、出版社を立ち上げて本を出したいというような人たちを誘致して、デスクとかＰＣといったようなものを貸与するような形で、ただそれだけでできるので、県の投資がすごく少なくて、まずは進むということがあると思う。
・美術館や図書館等、いろいろな施設と連携して絵本やアートブックのフェアを開催し、これを恒例イベントにうまく育てていって、世界中から人を集めることができれば、そのブックフェアに集まった人たちはワインを振る舞われて、さわやかな宿泊体験をしながら、山梨のよさを世界中に発信してくれるだろうという期待もできる。
・特に絵本やアートブックは一番身近な文化であって、芸術の中でも非常に身近なものであるから、特に若い女性や子育て中のお母さんたち、こういったところにアピールすることが非常にポイントで、長崎知事がずっと教育を強化したいというふうにおっしゃっているが、この大きな構想にもつながるのではないかと思う。
・こういった私たちにとって一番身近な文化が完全な東京偏重になっている。出版社が全部東京に集まっていて、だからこそ逆に風穴を開けられるんじゃないかと思う。北杜市には絵本の美術館等、絵本のいろいろな集積が実はもうあるので、そういう意味でシン

ボルプロジェクト、あるいはシンボルエリアになるのではないかと想像しており、参考になればと思う。

長崎知事

・いいですね。

中村委員

・私自身、スマートコミュニティー室という部署の長だが、会津若松市のスーパーシティ・スマートシティの取り組みのコンソーシアムの一つの役を持って取り組んでいる。
・我々の領域・テーマは、シニアのウェルビーイングということで取り組んでいる。会津若松市の取り組みは知名度が上がってきていると思う。
・スマートシティの取り組みとして、震災復興 10 年と言われるが、実は会津の方によくお聞きすると、30 年の歴史というか、会津地方のデジタル化、地域のデジタル化を非常に牽引してきたという自負があって、その延長の中で、今があるという話がある。
・この取り組みに関与し始めて、地元の方、いろいろな方とお話をしたり、いろいろと事業を進める上で感じていることと今回のテーマと重ね合わせていくと、やはり１つは、会津は、ＤＸというシンボリックなものに、非常に早くから取り組んできて、自治体含めてやっぱり地域の企業の皆さんも含めて、取り組みを徹底している。ある意味総力戦で、フォーカスしてやってる。
・田坂顧問がおっしゃったアテンションが成り立ってきている印象があり、集中というところがやはり１つのキーワードなのかなと思っていて、「会津といえば」という状況にまでなってきているが、これからやっぱり「山梨といえば」というのをどういうふうに形作っていくのかなと思っている。
・大きな戦略の話もあり、まさに今まで取り組んでいる中で、より強くできるものがたくさんあるのではないかと思っている。
・実は先週テレビで、長崎知事がある番組に出演されているところを見て、ブドウ寺大善寺の紹介や、ブドウの品種改良のお話を見て思ったのは、これまでも取り組まれているとは思うが、圧倒的なのかというところがやっぱり疑問符が残る。
・ブドウやワインに関わる取り組み、世界とのかけ橋等のいろいろな取り組みをされていると思うが、日本の中で山梨という位置付けが、どういうポジションにあるのかと少し思ったところがあり、すごくもったいないという印象。
・「山梨といえば」というところを、やはり１つ集中していただくというところが重要ではないか。文化芸術について、大善寺の話を聞いたときには、山梨の歴史もすごい深く広いし、まだまだ知られていないことがたくさんあるのではないかと感じたので、ぜひ、「山梨といえば」をより、広めていただきたい。
・最後に、「山梨といえば」を一番強く発信できるのは、市民・住民にならないといけな

いのではないか。やはり住んでらっしゃる方が、「うちの県はこんな素晴らしいところなんだ」といえる特徴があって、日本の中で唯一の山梨のよさを言えるようになって初めて、日本全国、そして世界に発信できていくと思う。

東座長

・中村委員がおっしゃった通り、私も全国各地のスーパーシティのリーダーアーキテクトを務めているが、世の中デジタル、テクノロジーといった文脈が多いが、私が関わっているところは、浜松市にせよ、加賀市にせよ、すべて文化とクリエイティビティを入れている。そうしないと、今世の中で進められてるスマートシティ自体が、金太郎飴的にほぼ同じようなものになってしまう。その地域のコンテクストとかストーリーとか歴史的な点、哲学とか思想とかを入れないと、市民の共感を得られない。何のためにやるんですかって話になってしまう。

・その中で、もともとの議論になっている、山梨の文化芸術とか歴史をどう作っていくのかというのが重要だが、もう１つ、アートに関しては、いち早くテクノロジーを組み込んでいくという世界も十分ある。

・特に音楽１つとっても、世の中、デジタル化と言われているが、音楽と書籍に関しては、いち早くデジタル化の技術を取り入れてグローバルに広げたということがあり、実はアーティストの人たちは、いかに技術を自分の作品に取り込んでより新しいものを作り出すかというところはすごく秀でてる。アートとテクノロジーをどうやって融合していって、世の中に何を出していくかというところ。

・それが後世で評価されていくのだと思うが、その中の一つとしてＮＦＴがある。ＮＦＴアートが、非代替性トークンと言われる形で、かなりブロックチェーンのテクノロジーを活用しながら、何十億円単位で取引されているが、このあたりまだルールがあまりなくて、かなり散在している。

・当然ながら、ＮＦＴが注目されて、いろんな作品を作られてきていて、最近、ＮＦＴだけの美術館・博物館ができてきている。

・新しいコンセプトを出されているのは、若い方々であって、そういう人が実は山梨にもいらっしゃる。ＮＦＴ等の活動をされている方々が、これから次世代のアート、彼らのジェネレーションのアートを作っていく。

・ここで山梨に１つフォーカスしていくと、常に新しい技術はまずフィジカルからいって、デジタルに移り、それがまたフィジカルで融合するという形だが、例えば、集英社は、原画展を開催するときに、ＮＦＴチップを入れて、博物館で開催するということをやっていて、ここがオリジナルなんだと。山梨にいけば、ある種のＮＦＴアートの原画が当然デジタルでも展示されてるし、そこで生まれてる人達がいると。アミューズさんがいらっしゃったりとか、いろんなアーティストが世界中から集積してきて、そこでクリエイティブファクトリーを作る動きが、今後次のジェネレーションで起こってくるの

ではないか。

・まさにここは今、グローバル含めて、ルールメイクの世界に入ってきているが、まず日本の皆さん、やはりそこは山梨に集まって考えようよと。今、文化庁と話をしているが、そういう新しい枠組みが出てくる。これは１つのビジョンでもあるが、今までのコンテクストを引き継ぎながらも、新しく、どういうアート芸術を山梨から生み出すかという観点もあるが、新しい領域もリサーチしながら、海のものとも山のものともというところは当然あるが、やはり大きなグローバルの動きになっているので、そういうところをいち早く山梨がキャッチアップして、先ほどのボローニャの絵本展の現代版のようなイメージかと思うが、そういうところで新しい技術を使って山梨に新しいアートの発祥が生まれていくというのも一つあるかなと考えた。

・まさに山梨からやっていく意義があるかなと思って、文科省の審議官と、教育文化スポーツ科学技術の競争寄付制度というものを考えようという話をしている。これは文科省横断でプロジェクトを組んでいて、文科省所管の文化教育スポーツ科学技術系に集まる団体が 2,000 ぐらいあるが、寄付金が日本で今 2,500 億円ぐらいしか集まっていない。先進国において、やはりこれは少なすぎるだろうということで、もう少しアートとか、科学技術における寄付カルチャーとして、1 兆円ぐらい集まるような仕組みを作っていかなきゃということで、税控除の仕組みも含めて考えようという動きが出てきている。

・まだ日本が文化先進国といえるのかは疑問符が残るが、やっと次のステージに入ろうと、中央の方も動き出しているので、まずこれを山梨から示していくという意味で、単純に寄付金を集めるというわけではなくて、ちゃんとエコシステムを作っていく流れを山梨から示していって、逆に文科省に提言するという動きも十分あるのかなと、田坂顧問のお話を伺いながら、感じたところ。

長崎知事

・まず、ブックフェアは、位置づけについては考える必要があるかもしれないが、シンボルプロジェクトの例としたら、とても面白いと思った。

・また、ＮＦＴアートについて、この前、松竹の方と話をしたところ、彼らはＮＦＴアートにもすでに取り組んでいるらしいが、例えば富士山については、それ自体を様々な映像を撮ったり、芸術化したりしているが、松竹映画のオープニングは、全部富士山の映像。そういう意味では、現場というかモデルが実際ここに存在するという点で、藤沢委員がおっしゃるように、集まりたくなるようなフックにはなりうるかなと感じた。

・最終的な目標については、繰り返しになってしまうが、要は新しい価値が生み出される、サムシング・ニューをやっていくには山梨、山梨といえば、サムシング・ニューをやる場というようなイメージができるところになりたいなと思っているが、そういう意味で、プロジェクト自体についても考える必要があるが、アプローチの仕方として、これだけというよりは、散発的に動いてもいいんじゃないかなと思っている。

・清水委員にお叱りを受けてしまうかもしれないが、何が成功して何が成功しないかもわからないし、行政が、行政資源、或いは財政資源を１つのものに集中するのは正しいアプローチかどうか、ちょっと実は自信がないと思っている。育てられるかどうかわからないところがあって、むしろ環境整備の方に、何がしかの資源投入するのを考えるのはどうなのかなと。
・今のお話を聞かせていただいて、このような思いというか悩みを抱いたところ。

東座長
・少し田坂顧問にもお話をお伺いしたい。今長崎知事がおっしゃったようなアプローチ、田坂顧問にご説明いただいたコンソーシアムのアプローチで、すごいアジャイルガバナンスで、新しく小さくスモールスタートしながら、いいものを引っ張り上げていくというプロセスを高速回転で回すということをやって、具体的な期限を決めて、誰と何をやって、どういうコンセプトを出すのかというところを具体化していかないといけないというところがある。このところのアプローチとして、例えば、１つそういう枠組みを作って、もうあるタイミング決めて進めてしまうというところを、小さくもこの会議以降、具体例を作っていくことが重要かと思うが、いかがか。

田坂顧問
・いまの「環境整備」という長崎知事の考えは、一つの戦略として大いに意味があると思う。
・つまり、例えば、１０個のいろいろなプロジェクトを考えて、どこにどの程度資源を投入するかという戦略は、たしかにリスクがある。そこで、先ほど申し上げたコンソーシアムの戦略で、色々なアイディアや、様々なプロジェクトや、それぞれの事業を持った人たちが、とにかく集まって、みんなで、お互いにやってることをプレゼンし合うことから始めるのが良いのではないか。特に、そうしたプレゼンの後の懇親パーティーなどは、非常に良い創発の場になる。
・そこで、色々な動きが創発し、自発的に何かが動き出すと、ある意味での自然淘汰が起こる。すなわち、ある動きは、最初盛り上がったが、３ヶ月後には終わっていたということもあるが、逆に、最初は小さな話だったが、次第に膨らんでいくということもある。そうした創発と自然淘汰は、私の過去のコンソーシアムの経験で、何度も見てきたことである。
・県としては、そうした場を創るという意味での「環境整備」に予算を使うのも、一つの戦略だろう。その１つの具体的方策は、先ほど申し上げたように、県主導でコンソーシアムを作り、社会的連携（ソーシャルアライアンス）で、文化施設や文化活動、文化事業や文化産業など、また、地域活性化や地域起こしに取り組まれている方々に、幅広く参加して頂くといったやり方が良いかと思う。

・こうした戦略は、それほどコストはかからないが、うまくやれば面白いプロジェクトや事業が創発する場になる。ただし、このコンソーシアムは、それを運営するコーディネーターにある程度の力量が問われるが、そこは東座長が一番得意な分野なので、県としても、色々とアドバイスを受けながら動かれたら、面白いことが起こると思う。

東座長

・私も山梨にいろいろと関わらせていただいて、かなり素材はあると思う。
・それをどうやってエコシステムとして組み合わせていくかとか、どうやって具体的にプロジェクトを推進するようなコーディネーターを何人か放り込んで作っていくかというところだけだと思うので、それをまずそういうチームアップ等、誰となにやるかというところは、小さくもまずはチームアップを始めた方がいいかなと思う。
・清水委員も、毎回、いつまでにやるんだということを言われているので、そろそろ、清水委員もちょっとジョインしていただいて、豪腕振っていただくところも大事かなと思うが、いかがか。

清水委員

・誤解があったら訂正をしておきたいのは、１つのことに決めろと言ってるわけじゃなくて、田坂顧問もおっしゃった通り、早くやってみるということが大事で、何が当たるかなんて絶対誰にもわからない。
・ただ、ストーリーとしては、何を目的にするんだということをしっかりと言った上で、長崎知事からお話があったように進めるのもそれはそれでいいし、漠然としているからもうちょっと絞ろうということなら、それもそれでいい。
・要は、数打ちゃ当たるということ。自然淘汰されてなくなることもあれば、もうはっきり言って、こんなもん当たるかっていうのが当たってみたりする。これは大丈夫だというのが、全然駄目だったりする。早くやって、取捨選択して、先ほどあったように、その中で軌道修正して構わないと思っている。
・一番よくないのは、言っちゃったからもうそれをそのまま押し通すということで、それをやめましょうというだけの話。どうせだったら早く、どんどん進めることが大事だし、先ほどお話のあった絵本の取組もそれも１つありだなと思う。
・出版業界でいえば集英社の会長は山梨出身だし、テレビ局についても、テレビ朝日や日本テレビも、会長はみんな山梨県の出身。私から話をすることもできる。
・とにかくやってみないことにはわからない。
・ただ大きいストーリーだけはちゃんとしておかないと、ぐちゃぐちゃになってしまうので、ストーリーだけちゃんとやって、途中からの修正はありで、もう早くやるべき。そうしないと、ここで議論だけして事務局が準備だけしてる時間がもったいない。

東座長

・まずはもう立ち上げを早急に急ぐという形で進められてもいいのではないかと思う。以前、長崎知事にアーティストの方をご紹介したことがあるが、実は昨日もお会いしていて、どう動くかとか、仲間のインフルエンサー的な方々をどうやって集めるかといった話をしている。今まで文化芸術系の団体は、コロナ禍以降、ここ２年間ずっと政府に対してロビー活動をやってきたが、結果、何かあったわけではなくて、自分たちで動こうという動きがかなり出てきている。

・どこかに柱が立てば、そこに集まるという状況になっていて、今がチャンス。言った者勝ちなので、私もいろいろなところに話をしているが、もう動いたところに全部集めようと思っている。

・柱を１つ、日本のどこかの地域で立てるというところを山梨からできれば、ちょうどアミューズの話もあるし、業界が動くので、ぜひ、これを引き続き検討いただければと思う。

長崎知事

・早速相談に乗っていただきたい。

東座長

・承知した。

・田坂顧問からコンセプトをばっと出していただいたので、御旗の印を作って、すぐに動かすことができればと思うし、できたら今年度中には動きを作りたいと思う。

・今回は短時間ではあったが、まず動き出そうということで合意できたのではないかと思う。引き続き、自然首都圏構想研究会を続けていきたいと思う。

田坂顧問

・最後に一言、申し上げておきたいのは、県の考え方として、「予算がこれくらいある」「これをどれくらい配れるか」という思考は、少し卒業されても良いと思う。

・実は、県の持っている資本というのは、先ほど申し上げた貨幣資本・金融資本以外に、関係資本とか信頼資本とか、様々なものを持っている。分かりやすく言えば、例えば、県が推薦すれば、これは「信頼資本」になる。

・例えば、ある社会起業家の組織を市長に紹介し、「会ってあげてください」と言うだけで、これは「信頼資本」を提供していることになる。

・また、この社会起業家をメディアに紹介するならば、「評判資本」（ブランドキャピタル）を提供していることになる。

・従って、これからの時代の戦略思考という意味では、県は自分たちの持っているこの「目に見えない資本」をどう活用するかという視点が非常に重要になると思う。先ほど

のコンソーシアムの動きを生み出すときも、予算がどうということを考えるよりも、本当に、その場が面白ければ、誰もが手弁当でやってくる。自分でお金を出して動き出す。だから、県の方で、例えば、場を作ることや、誰かと誰かを結びつけることや、推薦することや、メディアに紹介することなどは、積極的にしてあげることが重要だと思う。こうした動きは、あまり予算を使う話ではないので、ぜひそういう「目に見えない資本」を提供するという考え方を大切にして頂ければと思う。

以上